

信 行 要 文 ⑤

第十二回 法華講夏期講習会 第五期

（平成二十七年六月二十八日）

皆さん、おはようございます。

今回は青年部の方々を対象とした講習会であります。

今、様々な世界の情勢、世の中の動向というのは、非常に混沌としたものがあると思います。ヨーロッパにおける問題をはじめ、様々な地方で色々な事件が起きております。これを見るときに、私達一人ひとりが大聖人様の仰せられた「立正安国」、正を立てて国を安んずるということを考えなければなりません。つまり、この「国」というのは、もちろん日本国も含みますけれども、大きく一言えば世界という意味であります。やはり、真の世界平和は、大聖人様の仏法によって初めて成し遂げることができるのであります。

したがって、私達の理念は非常に大きく、また高く掲げた理想がそこにあるのでありますから、特に青年の方々は、これから先も大聖人様の仏法の広宣流布を目指して御精進いただきたいと思えます。

さて、本日は、お持ちのテキストの八ページ、十五の『諫暁八幡抄』からお話をしてみたいと思います。

15 諫暁八幡抄

天竺国をば月氏国と申す、仏の出現し給ふべき名なり。扶桑国をば日本国と申す、あに聖人出で給はざらむ。月は西より東に向かへり、月氏の仏法、東へ流るべき相なり。日は東より出づ、日本の仏法、月氏へかへるべき瑞相なり。月は光あきらかならず、在世は但八年なり。日は光明月に勝れり、五五百歳の長き闇を照すべき瑞相なり。仏は法華経謗法の者を治し給はず、在世には無きゆへに。末法には一乗の強敵充滿すべし、不軽菩薩の利益此なり。各々我が弟子等はげませ給へ、はげませ給へ。（御書一五四三_ノ一三行目）

この御文は『諫暁八幡抄』の一番最後の部分であります。

この『諫暁八幡抄』につきましては、第四期でも講義をいたしましたけれども、皆さん方には初めてでありますので、改めて『諫暁八幡抄』について少々申し上げたいと思えます。

『諫暁八幡抄』は、弘安三（一二八〇）年十二月、日蓮大聖人様が五十九歳の時にお認めあそばされた御書であります。この御書の御正筆、正本は総本山大石寺に厳護せられております。このなかには御靈宝虫むしぼらいだいほうえ 弘大法会に参詣された方々もいらっしゃると思いますが、その時の「御真翰披露」の折に、この『諫暁八幡抄』も皆さん方に御披露しております。

弘安三年の十一月十四日には、鎌倉の鶴岡八幡宮が炎上しました。一方、元の軍隊が再び日本を侵略しようとしている、これは元寇、蒙古襲来とも言われますが、こうした国内外が非常に切迫した情勢のもとで、この『諫暁八幡抄』は認められたのであります。

この蒙古の襲来は、皆さんも重々御承知のように、文永の役と弘安の役の二度にわたって、元と高麗国が日本に襲来したのです。

その一度目は文永の役で、これは文永十一（一二七四）年でした。そして二度目が弘安の役で、これは弘安四年に起こったのであります。この弘安の役において、元と高麗から日本に侵攻した艦隊は、元寇以前にはなかったほどの大規模なものでした。

この時は、主に九州北部が戦場となった次第であります。よく「神風」と言われるような強烈な大風が吹き、結局、元の大軍は滅び去ってしまったのであります。

そのようななか、この『諫暁八幡抄』が記されたのですが、この『諫暁八幡抄』を頂戴した方について、御書中には書かれておりません。つまり、これは特定の方への御書ではなく、本抄の最後に「各々我が弟子等はげませ給へ、はげませ給へ」とあることから、門下一般に与えられた御書であろうと思われるのであります。

本書の内容は大きく二つに分かれておまして、第一は、大聖人様が御本仏としてのお立場の上から、八幡大菩薩の怠慢を誠められております。つまり、八幡大菩薩というのは日本国の守護神でありまして、正しい法を持つ者を守護すると、仏様に誓っているにもかかわらず、末法御出現の御本仏日蓮大聖人様を迫害する鎌倉幕府を懲らしめずに、かえってこれを保護している。それ故に、八幡大菩薩は、梵天、帝釈、日天、月天等の罰を被ることは必然である。されば、速やかに八幡大菩薩は幕府の謗法を罰して、末法の法華経の行者を守護すべきである、と厳しく諫暁されているのであります。

八幡大菩薩への諫暁で有名なのは、大聖人様の竜口の法難の時であります。大聖人様は文永八（一二七一）年九月十二日に、竜口の御法難に値われました。竜口の刑場に向かわれる途中、鶴岡八幡宮の前に差し掛かった時に、大聖人様は馬から下り、八幡大菩薩に向かって、「今、かかる大難に際して、八幡大菩薩は法華経の行者を守護することを誓っているにもかかわらず、守護の用きがないのはどうしたことか」と叱咤・諫暁あそばされたのであります。

そして、八幡大菩薩に対して厳しく諫暁あそばされたあと、大聖人様は竜口の刑場に向かわれ、そこでまさに頸を斬られんとした時、突如として月の如く鞠のような光り物が現れ、東南の江ノ島の方角から西北の方角へと光り渡ったのであります。

これを見て、大聖人様の頸を斬ろうとしていた太刀取りは目がくらんで倒れ伏し、そのほかの兵士どもは^{ひる}怯み恐れ、一町^{いっちょう}ばかり走り去る者、あるいは馬から下りてかしこまる者、あるいは馬の上でうずくまってしまふ者など、これら兵士どもはいずれも恐れおののき、近寄る者も、返事をする者もなく、押し黙って、途方に暮れているばかりであったのであります。

このことは、大聖人様が『種々御振舞御書』（御書一〇五九^ぎ）に詳しくお認めあそばされておりますので、お帰りになりましたら是非、拝読していただきたいと思ひます。

この時の光り物については『四條金吾殿御消息』に、
「三光天子の中に月天子は^{ひかりもの}光物とあらはれ^{たつのくち}竜口の^{くび}頸を^助たすけ、^{みょうじょう}明星天子は四・五日已前に下りて日蓮^{げんざん}に見参し給ふ。いま日天子ばかりのこり給ふ。定めて守護あるべきか」（御書 四七九^ぎ）

と仰せられております。

これはどういうことかと言ひますと、大聖人様が竜口の刑場に向かわれる途中、八幡宮の前で、八幡大菩薩を叱咤・諫暁あそばされました。その叱咤・諫暁に^{おこたへ}応えて、諸天善神である八幡大菩薩が出現し、大聖人様を守護したのが、三光天子のなかの月天子なのです。つまり、光り物は月天子の眷属となって、大聖人様を守護されたということでもあります。

三光天子というのは、日・月・星の三つでありまして、日天子は太陽です。それから月天子は月です。そして三番目の明星天子は星であります。

法華經の序品第一には、

「^{みょうがつ}名月天子（月）、^{ふこう}普香天子（星）、宝光天子（日）」（法華經 五七^ぎ）

とあり、この三光天子のなかの月天子が光り物となって、竜口の頸の座において、大聖人様の頸を斬ろうとした、まさにその時に現れて、大聖人様をお守りしたということになります。

時の最高権力者である幕府の力をもってしても、大聖人様の頸を斬ることができなかつたという^{たがひ}厳然たる事実、また大聖人様が八幡大菩薩に対して叱咤・諫暁あそばされた、つまり「守護せよ」と叱咤されたあと、その斬首の時に至つてこうした現証が起つたという不思議は、まさに時の一致であり、この事実は、仏法で説くところの依正不二の原理以外には説明できないのであります。

また、この竜口における法難は、それまでの上行菩薩の再誕としての大聖人様の^{まが}仮りの姿、つまり^{すいじゃくしん}垂迹身を^{はら}発つて、^{く おんがんじよ じ じゅゆうほうしんによらい}久遠元初自受用報身如来の^{ほんじやく}真実の姿を^{けんぼん}顕された「^{けんぼん}発迹顕本」といふ、極めて重大な意義を持っているのであります。

このことは、皆さん方も普段、御住職方から聞いて解つておられると思ひますけれども、大聖人様は『開目抄』のなかで、

「日蓮といふし者は、去年九月十二日子^{ね うし}丑の時に^{くび}頸は^{これ}ねられぬ。此は^{こんぼく}魂魄佐土の国に

いたりて云云」(御書 五六三)

と明かされております。この「魂魄」というのは、まさに久遠元初の自受用報身としての御魂魄でありまして、大聖人様は竜口の法難という、身命を賭した大法難のなかで、久遠元初の御本仏としての御境界を開顕あそばされたのであります。

また、この御文の重要なところは、大聖人様が八幡大菩薩を責めるのは、八幡大菩薩を敵とするのではなく、諸経論に説かれているように、まことの願いがかなわない時は、守護神を叱るべき旨を教示され、大難を受けても法華経を説いて邪義邪宗を破折するのは、まさしく一切衆生を救済するためであると、つまり一切衆生救済という仏様の慈悲を、ここで述べられているのです。

そして、最後に今、拝読した御文に至って、「天竺国をば月氏国と申す、仏の出現し給ふべき名なり。扶桑国をば日本国と申す、あに聖人出で給はざらむ。月は西より東に向かへり、月氏の仏法、東へ流るべき相なり。日は東より出づ、日本の仏法、月氏へかへるべき瑞相なり。月は光あきらかならず、在世は但八年なり。日は光明月に勝れり、五五百歳の長き闇を照すべき瑞相なり。仏は法華経謗法の者を治し給はず、在世には無きゆへに。末法には一乗の強敵充滿すべし、不軽菩薩の利益此なり。各々我が弟子等はげませ給へ、はげませ給へ。」と仰せられ、大聖人様が末法の御本仏としての確信のもとに、三大秘法の大法が仏法西還の定理によって、日本から中国、インドへと流布されていくことを明かされ、門下にその弘通を勧められているのであります。

前置きが少し長くなりましたけれども、本文に入ります。

まず「天竺国をば月氏国と申す、仏の出現し給ふべき名なり。扶桑国をば日本国と申す、あに聖人出で給はざらむ」と仰せられるなかの「天竺国」というのは、インドの古称、古い呼び名であります。

これは、玄奘三蔵が『大唐西域記』に、

「あたかも無明の長夜に明月を必要とするように、この土の聖賢が遺法を受け継いでいる。それはちょうど、明月が闇を照らしているようなものであるから、インドのことを月と呼ぶのである」

という意味のことをおっしゃっており、日本や中国でインドのことを月氏国と言ったのは、この玄奘の説に拠るものであらうと推測されるのであります。

つまり、天竺国すなわちインドを月氏国と称することは、インド出現の釈尊の仏法が月のようであることを象徴している、と仰せなのであります。

それに対して「扶桑国」というのは、中国から見て太陽の出る東方にある国、すなわち日本を指すのでありまして、ただいま拝読の御文の意は、扶桑国を日本と呼ぶが、どうして聖人が出現されないはざらむか、とおっしゃっております。

つまり、天竺国を月氏国と称することは、インドの釈尊の仏法が月のようであるのに対して、扶桑国を日本と称するのは、御出現される御本仏大聖人様の仏法が太陽のよう

であるから、御本仏大聖人様の仏法を太陽に、釈尊の仏法を月に譬^{たと}えて、そこに勝劣を判じているのであります。

このことについて、総本山第二十六世日寛上人は『当流行事抄』に、

「月氏は是れ迹門の名なり、故に脱迹^{だつしゃく}の仏応に出現すべきなり。日本は即ち是れ本門の名なり、下種の本仏^{あに}豈出現せざらんや。国名寧ろ勝劣^{むし}に非ずや」(六卷抄 一八〇頁)

とおっしゃっております。

さらに『依義判文抄』には、日本の名に三意があることを、次のようにおっしゃっております。

「一には所弘^{しよぐ}の法を表わして日本と名づくるなり。謂わく、日は是れ能譬^{のうひ}、本は是れ所譬^{しよひ}、法譬^{ほつ}俱に挙げて日本と名づくるなり。経に云わく『又、日天子の、能く諸^よの闇を除くが如く』云云。宗祖の云わく『日蓮^{いわ}が曰く、日は本門に譬うるなり』云云。日は文底独一本門に譬うるなり。四条抄に『名の目出度きは日本第一』と云うは是れなり云云。

二には能弘^{のうぐ}の人を表わして日本と名づくるなり。謂わく、日蓮の本国なるが故なり。故に顕仏未来記に云わく『天竺・漢土にも亦法華経の行者之れ有るか如何。答えて云わく、四天下の中に全く二の日無し、四海の内豈両主有らんや』云云。故に知んぬ、此の国は日蓮の本国なり云云。

三には本門広布の根本を表わして日本と名づくるなり。謂わく、日は即ち文底独一本門三大秘法なり。本は即ち此の秘法広宣流布の根本なり、故に日本と云うなり。応に知るべし、月は西より東に向かい、日は東より西に入る、之れを思い合わすべし。

然れば則ち、日本国は本因妙の教主日蓮大聖の本国にして、本門の三大秘法広宣流布の根本の妙国なり」(同 一一一頁)

と、日寛上人は日本という名に三つの深い意味が存していると、甚深の御指南をあそばされております。

次に「月は西より東に向かへり、月氏の仏法、東へ流るべき相なり。日は東より出づ、日本の仏法、月氏へかへるべき瑞相^{ずいそう}なり」とあります。

月は西より東に向かうように、西方のインドに出現した釈尊の仏法は東へと流布し、日本に伝えられた。すなわち、これ仏法東漸^{とうぜん}であります。

これに対して、日が東から西に向かうように、御本仏大聖人様の仏法は東の日本から西のインドに向かつて還^{かえ}っていくのであると仰せられているのであります。つまり、仏法西還であります。

ただし、ここで仏法西還、つまり大聖人様の仏法がインドに還^{かえ}るということは、狭義に解するのではなく、広義に解釈をして、大聖人様の仏法がインドのみならず、広く全世界に流布していく相であると解すべきであると思ひます。

まさに今日、大聖人様の仏法が、遠くアフリカのガーナをはじめ、トーゴ、ベナン等にまで流布し、また近くは台湾、韓国をはじめ、最近ではネパール、あるいは東南アジア諸国に拡大しております。さらに、アメリカ、カナダ、パナマ、ブラジル、アルゼンチン、さらにはヨーロッパなどにも寺院等が建立されております。

こうした現状を見ると、我々の努力で刻々と世界広布実現の夢がかなえられていることに、私どもは心から喜びを感じるとともに、なお一層の精進を重ねていかなければならないと痛感する次第であります。

なお、この御文につきまして、日寛上人は『当流行事抄』に、

「二には順逆に寄す。謂わく、月は西より東に向かう、是れ左道にして逆なり。日は東より西に入る、是れ右繞にして順なり。順逆豈勝劣に非ずや」(同一八〇頁)と仰せられております。

ここに「左道」と「右繞」ということが出てまいりましたけれども、これは順逆を表します。

左道というのは、古代中国で右を尊び、左を卑しんだことから、正しくない道、不正な道、邪道のことを、左道と言うのであります。それに対して、まさに「日は東より西に入る」ことは右繞、すなわち右回りだと仰せです。

右繞というのは敬礼法の一つでありまして、これは古代インドの礼儀に習い、敬意を払う対象に対して、右の肩を相手に向けて時計回りに歩く礼拝法がありました。ここではそれに拠り、太陽が東から西に入ることを右繞であるとして、順逆のなかには順であると、大聖人様の仏法を譬えておっしゃっているのです。

次に「月は光あきらかならず、在世は但八年なり。日は光明月に勝れり、五五百歳の長き闇を照すべき瑞相なり」とあります。

釈尊の仏法と大聖人様の仏法を月と日の光に譬えて、月氏の仏法、すなわち釈尊が説かれた教えにおいて、出世の本懐である法華経が説かれて衆生を利益せられた期間は、わずか八年であった。これに対して、末法の御本仏大聖人様の本因下種の仏法は、第五の五百歳、すなわち末法の初めから尽未来際に至るまでの長きにわたって、闇を照らし続けていく大白法であることを、ここで示されているのであります。

この御文につきましても、日寛上人は『当流行事抄』に、

「月は光明らかならず在世は但八年なり、日は光明らかにして末法万年の闇を照らす。長短寧ろ勝劣に非ずや」(同頁)

とおっしゃっているのであります。

つまり「月は光明らかならず在世は但八年なり」という意味は、御承知の通り、釈尊は五十年間にわたって法を説かれましたけれども、最後に真実の法たる法華経を説いた、最後の八年のことを言っているのです。ですから、釈尊は八年間であるのに対して、大聖人様は末法万年の衆生の闇を照らす大仏法であり、そこに勝劣が明らかである、とお

っしやっているのです。

そして「**仏は法華經謗法の者を治し給はず、在世には無きゆへに。末法には一乗の強敵ごうてき充滿すべし、不輕菩薩の利益ふきょう くれ此なり。各々我が弟子等はげませ給へ、はげませ給へ**」というのが最後の御文であります。

「仏は法華經謗法の者を治し給はず、在世には無きゆへに」との仰せは、釈尊在世には、基本的に法華經誹謗の者はいなかったのであります。つまり、釈尊の御化導は初めに爾前権教が説かれ、だんだん、だんだんと高度な教えに至り、最後に法華經が説かれたのです。つまり、衆生を調機調養じょうき じょうようして、法華經を説いたのでありますから、その間においては全部、そういった者達は教化・教育されて、法華經を聞くことになったのであります。

ただし、末法の衆生は本未有善もと、つまり本より善がないという意味でありますから、まさしく法華經誹謗の強敵が充滿する時代です。したがって、かかる時には不輕菩薩のように強いて法華經を説き、折伏を行じて、逆縁の衆生を救っていくことが極めて肝要であるとおっしゃっているのであります。つまり「末法の修行とは折伏である」ということです。

この御文について、日寛上人は、

「次に種脱を明かす。法華誹謗の者を治せざるは即ち在世脱益の迹仏なり。末法は即ち不輕の利益に同じ、豈下種の本仏に非ずや。十勝抄に所謂『迹門を月にひえ、本門を日に譬う』云云。学者まさ応に知るべし、蓮祖若し久遠元初の自受用身に非ずんば焉ぞ教主釈尊に勝るることを得べけんや」(同ご)

と、甚深の御法門を仰せあそばされています。

このなかで「不輕の利益」ということをおっしゃっておりますけれども、これは逆縁の功德、逆縁成仏どつく、毒鼓の縁の原理を述べたものであります。つまり、強いて法華經を説くことで、たとえ相手が反対し誹謗したとしても、相手の心魂しんこんに妙法蓮華經が下種され、やがてそれが縁となって入信に至り、最終的には救っていくことができるのであります。

不輕菩薩い おんのうは威音王仏の滅後、像法時代に出現し、一切衆生に仏性があるとして、衆生に二十四字の法華經を説いて礼拝し、軽んじなかつた。この軽んじなかつたということで、不輕菩薩の名があるのであります。

この二十四字の法華經とは、

「我われ深く汝等なんだちを敬う。敢えて輕慢きょうまんせず。所以ゆ えは何ん。汝等皆菩薩みなの道を行じて、当まさに作仏さぶつすることを得べし(我深敬汝等。不敢輕慢。所以者何。汝等皆行菩薩道。当得作仏)」(法華經 五〇〇ご)

のことで、みんな、どんな人にも仏性があるから、必ず救われるということを言っているのです。

不輕菩薩は輕蔑され、杖木瓦石の難に値いながらも、みんな仏性があるからと言って一人ひとりを軽んぜず、礼拝したのであります。この時、不輕菩薩を軽んじた人は、一度は地獄に墮ちたが、法華經を聞いた縁によって救われたのです。釈尊は、この不輕菩薩の修行を通して、滅後の弘經の方軌と、逆縁の功德について説かれているのであります。

この不輕菩薩の行体は、末法の私達の折伏に当たっても、極めて大事なことであると思います。いかなる人であろうとも、必ず仏性を持っているのです。もちろん、末法の衆生ですから地獄・餓鬼・畜生という三悪道も持つてはいますけれども、どんな人でも、十界互具の上から言えば仏性があるのであり、その仏性を喚起していくことが大事なのです。

では、この仏性は何によって喚起されるかということ、御本尊様という絶対の縁があり、この妙法蓮華經の縁に触れて初めて、仏性は喚起されるのであります。よく下種とか結縁と言いますように、相手が話を聞こうが、聞くまいが、私達は妙法蓮華經を説いていくことが大事なのです。

お友達を折伏して、その時は解らなくても、それから先、二年、三年、あるいは五年先に、あなたが大聖人様の仏法のすばらしさを語ったひとことが、その人の耳朶に残っていて、それが縁になって入信された方というのも結構いらっしゃるのです。ですから、なにしろ下種折伏が大事であります。

なかには、仏法の話をするとうささんくさいなどと言うお友達もいるかも知れません。しかし、そのようなことは一向に構わないのです。それが、むしろ逆縁になるのです。逆縁成仏と言いますように、逆縁でも救われるのでありますから、正法をしっかりと相手の心魂に届くように説くのが大切であります。

別にこれは、けんか腰に説く必要はありませんよ。「強折」というのは強く折伏することであって、相手の人格をけなすことではありません。慈悲の心を持って間違った信仰に対して強く折伏することを強折と言うのですから、勘違いしてはいけません。

やはり、折伏は相手を救う慈悲行ですから、相手が仮りに悪口を言ったとしても、私達がけんか腰であったならば、相手は逃げてしまいます。だから、そういうことを心得て、法を説いていくことが大事でしょう。その意味では、この不輕菩薩の利益ということ、私達はよく知る必要があると思います。

では、次にまいります。十六番目の『南条殿御返事』です。

16 南条殿御返事

釈迦仏は、我を無量の珍宝を以て億劫の間供養せんよりは、末代の法華經の行者を一日なりとも供養せん功德は、百千万億倍過ぐべしとこそ説かせ給ひて候（御書一五

六九(五行目)

本抄は、弘安四（一二八一）年九月十一日、大聖人様が六十歳の時、富士上野の南条時光殿へ与えられた御書であります。

この南条時光殿については、皆さん方もよく御承知と思いますが、まさにこの総本山大石寺の開基檀那でありまして、正元元（一二五九）年、南条^{ひょうえ}兵衛七郎の次男として生まれました。これは、大聖人様が三十八歳の時、日興上人が十四歳の時であります。

時光殿のお母さんは松野六郎左衛門の息女で、妙法尼であり、また姉の蓮阿尼の子供は第三祖日目上人であります。

時光殿が七歳であった文永二（一二六五）年に、父親の南条兵衛七郎が亡くなりました。そして十六歳の時に、今度は兄の七郎太郎を失ったのであります。

昔の名前の付け方は、お父さんが南条兵衛七郎という名前であると、その子供は南条七郎太郎とか、南条七郎次郎というように付けられたのです。つまり、時光殿は南条七郎次郎時光と言いますから、七郎さんの次男であることが解るのです。そして、長男は七郎太郎と言いましたが、この方は、今言った通り、時光殿が十六歳の時に、十八歳の若さで亡くなってしまふのです。したがって、家督は長男が継いでいましたが、お亡くなりになってしまったので、七郎次郎時光殿が南条家を継いだということであります。

家督を継いだあと、この総本山一帯の地頭となったのであります。昔はこの辺りを静岡県富士郡上野村と言ったのです。南条時光殿のことを「上野殿」と言いますが、これは土地の名であります。今も上野という名称は、上野小学校とか、上野中学校のように、学校などに残っています。今は、どんどん地名が変更されて、昔のことが解らなくなってしまっていますが、上野の名前は、今でも少しは残っております。

さて、時光殿は大聖人様に幼い時から帰依して、また日興上人を師とも兄とも仰いで、純真な信心に励んだ方であります。特に、熱原法難の時には、信者の中心者として活躍され、まさに僧俗を守って外護の任を果たされましたので、大聖人様からは「上野賢人」（御書一四二八）と称賛されております。

また、奥さんは妙蓮と申しますが、時光殿と共に数多くの御供養を大聖人様になされております。熱原法難のあと、幕府の弾圧により本当に^{きゅうぼう}窮乏し、自らが乗る馬も、着る物もない状況のなかで、九男四女の子供を育てながら御供養をし続けたのであります。

こうしたなか、弘安四年の夏ごろには病にかかりましたけれども、大聖人様の御祈念と日興上人の激励、そして何よりも時光殿の強盛^{ごうじょう}な信心によって、その生命力をたくましくし、病魔を克服することができたのであります。

さらに、日興上人が身延を離山する時には、進んで自領すなわち、この上野の地に日興上人をお迎えし、大石ガ原を御供養申し上げて、今日の総本山大石寺の基礎を作られたのであります。

また、大聖人様からはたくさんの御書を頂いておまして、現存するだけでも三十数通の御書を頂いております。

そして、時光殿は元弘二（正慶元・一三三二）年五月一日に、行年七十四歳をもって亡くなりました。続いて、この翌年の元弘三年二月七日には、日興上人が八十八歳で御入滅あそばされました。

皆さん方もよく御承知の通り、時光殿は大法広布のため、権力やあらゆる迫害にも屈することなく、信心を貫いた方でありまして、まさに信徒の鑑とされております。

総本山では、毎月一日に衆会と一言いまして、丑寅勤行に塔中・山内の御僧侶方が出仕し、大行尊霊の衆会を行っている次第であります。また、五月一日が祥月命日でありますので、毎年五月一日には、客殿で祥月命日忌の法要を修したあと、大坊から墓参に行っております。

さて、この御書の内容について言いますと、初めに御供養のお礼を述べられたのちに阿育大王の故事を引いて、今、末法の法華経の行者を供養する功德は、釈迦仏を供養するよりも百千万億倍、勝れていることを確言されております。

阿育大王というのは、アショーカ大王とも呼ばれますが、この人はインドを統一した最初の王様であると言われております。まことに暴虐な王様でありましたが、のちに仏教の精神に基づいて、慈悲深い王として善政を行った方であります。

この阿育大王は、今言った通り凶暴な性格でありましたので、まず即位に際して異母兄弟九十九人を殺害したというのです。また、即位九年後にはカリング地方を征服して約十万人を殺害し、さらに約十五万人を捕虜にしたとされます。この王は、実はこの事件の二年前に仏教に帰依していましたが、この惨状を見て深く反省して、仏教を真剣に信じ行ずるようになったのであります。

その後、この大王は武力による征服をやめて、仏教の慈悲の精神に基づき、法による統治を図ったのであります。例えば、人間と動物のための二種類の病院を設けるとか、多くの井戸や泉を掘るとか、あるいは有益な薬草を栽培させるとか、街路に樹木を植えるとか、休息所を造るなどの社会事業を起こしたのです。また、それまで極めて厳しい刑罰主義を採っておりましたけれども、寛刑主義すなわち寛大なる刑罰主義に、がらりと転回したのであります。そして、即位二十六年までに二十五回の恩赦を行ったと言われております。

さらに、辺境の民族、外国人とも親しく交渉を持ち、今のシリア、エジプト、マケドニア、南インド、スリランカ、カシミール、ガンダーラなどの諸地方に、使節、あるいは伝道師、いわゆる布教師を派遣したと言われております。

大聖人様は『白米和布御書』に、

「阿育大王は昔得勝童子なり。沙の餅を以て仏に供養し一閻浮提の王と為る」（御書 九二八頁）

とおっしゃっております。つまり、阿育大王の前身は得勝童子であり、得勝童子は王舎城で乞食を行っていた釈尊に対し、砂の餅を御供養した童子であります。得勝童子は、その功德によって、のちに阿育大王として生まれたと一言われているのであります。

このあと『南条殿御返事』では結要付嘱について述べられ、さらに法身の四処について重々の御法門を述べられております。

そして、大聖人様こそが末法の御本仏であることを明かされ、その大聖人様のまします所は、靈山浄土にも劣らぬ最勝の地であることを示し、もって、この砌に臨まん輩は、身口意の三業にわたる悪を転じて、仏の生命に具有する三種の徳相、つまり法身・般若・解脱の三徳を成ずることができる、と仰せられております。

最後に、時光殿の病気に対してお見舞いと懇切な指導をなされ、早く病気を治し、靈山浄土に劣らぬ寂光土である大聖人様のもとに詣でるよう、語りかけております。

これが、この御書の概要であります。

それでは、本文に入ります。

「釈迦仏は、我を無量の珍宝を以て億劫の間供養せんよりは、末代の法華經の行者を一日なりとも供養せん功德は、百千万億倍過ぐべしとこそ説かせ給ひて候」という御文ですが、これと同様の御文はずいぶんあります。

例えば『国府尼御前御書』には、

「釈尊ほどの仏を三業相応して一中劫が間ねんごろに供養し奉るよりも、末代悪世の世に法華經の行者を供養せん功德はすぐれたりととかれて候。まことしからぬ事にては候へども、仏の金言にて候へば疑ふべきにあらず」（同 七三九㊦）

とあり、続いて、

「末代の法華經の行者を供養するは、十号具足します如来を供養したてまつるにも其の功德すぎたり」（同㊦）

とおっしゃっています。

また『法蓮抄』には、

「十号と申すは仏の十の御名なり。十号を供養せんよりも、末代の法華經の行者を供養せん功德は勝るとかゝれたり」（同 八一三㊦）

と仰せであります。つまり、釈尊を供養するよりも、「法華經の行者」を供養する功德が勝れているとおっしゃっているのです。

では、法華經の行者とは、いかなる方であるか。法華經の行者というのは、総じて言えば、法華經を行ずる者はみんな法華經の行者になるのですが、別して言えば、御本仏大聖人様お一人なのです。だから、垂迹の仏である釈尊を供養するよりも、御本仏である大聖人様を供養する功德のほうが勝れていると、功德の軽重に寄せて、大聖人様のすばらしさ、尊さを、このように示しているのであります。

『新池殿御消息』にも、

「況んや法華經の行者を供養せん功德は、無量無辺の仏を供養し進まいらする功德にも勝れて候なり」(同 一三六三ぎ)

と、法華經の行者への供養が、いかに勝れているかを示されております。

しかし、この法華經の行者を間違えてはいけません。総じては、法華經を行じている者はみんな法華經の行者であるからといって「俺だって法華經を行じているから、法華經の行者だ」などと威張ってはだめなのです。今言った通り、別しては大聖人様のことであり、やはりそこに総別という立て分けがしっかりとあるのであります。

ちなみに、先程の『法蓮抄』の初めに示される「十号」について述べますと、初めは「如来」で、この如来とは、一切諸法の根本の真理を体現し、三世にわたる因果律を証得した人のことであります。

次に「応供おうぐ」とは応受供養の意で、人天の供養を受けるに足る者のことを言い、それは仏様だということです。

それから「正遍知しょうへんち」は正等覺とうがくとも言いまして、一切の智を具えて、諸法をあまねく正しく理解する者のことです。

次が「明行足みょうぎょうそく」で、過去・現在・未来の三世に通達して、善行を修して満足する者を言います。

五番目は「善逝ぜんぜい」で、善よく逝ゆくの意でありまして、無量の智慧をもって迷いの世界をよく超え出て、八正道を行じて仏の境地に達する者という意味であります。

六番目の「世間解げ」は、因果の理法を悟り、世間・出世間のことをよく理解する者の意です。

それから「無上士」は、衆生のなかで、この上なく勝れている者ということです。

そして「調御丈夫じょうごじょうぶ」は、一切衆生を調伏し、制御して、成仏させる力を具えている者のことです。

次に「天人師」は、天と人の師匠で、あらゆる人を指導し、師となれる者の意です。

それから最後は「仏世尊」で、仏とは智や徳が円満で、目覚めた者の意で、世尊とは世のあらゆる人から尊敬される人のことを言います。

この如来・応供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏世尊を仏の十号、十の呼び名と言うのであります。

さらに『撰時抄』には、

「日蓮は日本第一の法華經の行者なる事あえて疑ひなし」(同 八六四ぎ)

と、大聖人様こそが末法の法華經の行者であるとの仰せです。

この法華經の行者の意義につきましては、『御義口伝』に、

「如来とは釈尊、総じては十万三世の諸仏なり、別しては本地無作の三身なり(中略)されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり。無作三身の宝号を南無妙法蓮華經と云ふなり」(同 一七六五ぎ)

とあります。つまり、別しての法華經の行者とは「本地無作の三身」の仏、すなわち久遠元初自受用身のことであると明かされているのであります。

したがって、迹仏の釈尊への供養よりも、法華經の行者への供養が勝れるというのは、大聖人様こそが、釈尊よりもはるかに勝れたる久遠元初自受用身という御本仏であるからであります。すなわち、この御文は、御供養の功德の軽重に約して、大聖人様こそ、在世釈尊にも勝れる御本仏であることをお示しあそばされているのであります。

次に、十七番目に入ります。

17 南条殿御返事

教主釈尊の一大事の秘法を靈鷲山にして相伝し、日蓮が肉団の胸中に秘して隠し持てり。されば日蓮が胸の間は諸仏入定の処なり、舌の上は転法輪の所、喉は誕生の処、口中は正覺の砌なるべし。かゝる不思議なる法華經の行者の住処なれば、いかでか靈山淨土に劣るべき。法妙なるが故に人貴し、人貴きが故に所尊しと申すは是なり。(御書一五六九^ノ九行目)

まず初めに「教主釈尊の一大事の秘法を靈鷲山にして相伝し、日蓮が肉団の胸中に秘して隠し持てり」とあります。

釈尊は涌出品におきまして、迹化の菩薩達が滅後の弘通を願い出たのを制止し、大地より上行菩薩を上首とする本化地涌の菩薩を呼び出して、寿量品を説いたのち、如来神力品において、この上行菩薩等の四菩薩を上首とする地涌の菩薩に、法華經の肝要を付嘱し、末法流布を託されました。

すなわち、如来神力品において、

「要を以て之を言わば、如来の一切の所有の法、如来の一切の自在の神力、如来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事、皆此の經に於て宣示顯説す」(法華經 五一三^ノ)

と仰せの如く、釈尊は法華經の肝要たる妙法蓮華經を四句の要法に括って、上行菩薩へ付嘱されたのであります。

大聖人様は、その上行菩薩の再誕として末法に御出現あそばされたのでありますが、上行菩薩としてのお立場はあくまでも外用のお姿であって、内証深秘の辺から拝するならば、大聖人様はまさしく久遠元初自受用報身如来の再誕であります。

故に、日寛上人は『文底秘沈抄』に、

「若し外用の浅近に拠れば上行の再誕日蓮なり。若し内証の深秘に拠れば本地自受用の再誕日蓮なり。故に知んぬ、本地は自受用身、垂迹は上行菩薩、顯本は日蓮なり」(六卷抄 四九^ノ)

と御指南されております。

また『百六箇抄』には、

「久遠元始の天上天下唯我独尊は日蓮是なり」（御書 一六九六㊦）

と、甚深の御法門をあそばされております。

さらにまた、三位日順師は『詮要抄（本因妙口決）』に、

「久遠元初自受用報身とは本行菩薩道の本因妙の日蓮大聖人を久遠元初の自受用身と取り定め申すべきなり」（富要二 - 八三㊦）

とおっしゃっております。

この御本仏としてのお立場から振り返って、結要付嘱の正体を拝しますと、日寛上人は『文底秘沈抄』に、

「教主釈尊の一大事の秘法とは結要付嘱の正体、蓮祖出世の本懐、三大秘法の随一、本門の本尊の御事なり。是れ則ち釈尊塵点劫より来心中深秘の大法なり、故に一大事の秘法と云うなり」（六卷抄 六四㊦）

と仰せられております。すなわち、釈尊より付嘱を受け、今、大聖人様が御所持あそばされるところの妙法は、法華経の題号としての妙法五字ではなく、久遠の本法たる妙法五字であり、まさしく三大秘法の随一、本門の本尊であります。

この妙法五字は、釈尊をはじめ三世諸仏の成仏得道の根本の法であり、三世にわたって一切衆生を救済する根源の法であります。すなわち、久遠の本法たる妙法五字は、人即法、法即人の妙法蓮華経にして、人に約せば久遠元初自受用報身如来の再誕、末法御出現の御本仏宗祖日蓮大聖人様であり、法に約せば久遠元初の妙法であります。

つまり、大聖人様は、教相の上では、上行菩薩として神力品で釈尊から結要付嘱を受けましたけれども、内証深秘の上から拝すれば、この法華経神力品における付嘱の儀式は本来、久遠元初自受用報身如来であられる御本仏大聖人様が、釈尊が寿量品において久遠の仏寿を開顕する時の助けとして本化の菩薩の姿を示し、かつまた末法弘通の付嘱を受け、末法に御出現あそばされることを予証せられることであつたのであります。

すなわち、法華経に現れた上行菩薩は仮りの姿でありまして、久遠の御本仏大聖人様が、仏法付嘱の上から、過去に上行菩薩として御出現あそばされたということになるわけであります。

したがって、この大事を御身に具し給うところを「日蓮が肉団の胸中に秘して隠し持てり」と仰せあそばされているのであります。

次に「されば日蓮が胸の間は諸仏入定の処なり、舌の上は転法輪の所、喉は誕生の処、口中は正覚の砌なるべし」と仰せであります。この御文は、まさに「法身の四処」について述べられているところであります。

四処とは、仏の「生処」、つまり誕生の処。「得道処」、つまり正覚、覚りを得た処。それから「転法輪処」、つまり法を説かれた処。「入涅槃処」、つまり涅槃に入られた処、

この四つを言い、「生身の四処」とも称します。この四処は、仏様の八相のなかでも重要視されているからです。

「生身」というのは、諸仏菩薩が衆生済度のために、父母に託生して生まれてくる身体のことです。すなわち、歴史的な世界に現れた仏様の身体のことです。

これに対して「法身」というのは、父母所生の生身に対する語で、法を身体とする仏身、絶対的な真理の法身のことです。

この生身と法身とを比べますと、生身は歴史的世界に現れた仏陀の身体であって、人格性は持ちますが、無常の存在です。つまり、仏といえども、その肉体は必ず滅するのであります。これに対して法身は、仏の肉体は滅しても、仏が説かれた絶対的な真理は教法として、あるいは経巻として後世に伝えられていきますから、永遠であります。

天台大師は、この法身の四処について『法華文句』（学林版文句会本中六四七）に、法華経は、釈尊滅後においても説かれた絶対的真理すなわち法として残る故に法身の四処であると言っております。

また、妙楽大師は『法華文句記』に、

「法華経を受持、読、誦、^{げせつ}解説、書写する所、および法華経の在る所は法身の四処であるから、塔を起てて供養すべきである」（学林版文句会本中 六四七）取意

と言っており、これは、永遠の法としての法華経およびその経巻のある所は法身の四処であるとの仰せであります。

この妙楽大師の言葉に対して、日寛上人は『依義判文抄』におきまして、文底肝心の立場から、

「文中の『法身』等とは、即ち是れ久遠元初の自受用身なり、^{いま}今生身に対する故に法身と云う」（六卷抄 一〇五）

とおっしゃっております。つまり法身の四処とは、久遠元初自受用報身如来、末法御出現の御本仏日蓮大聖人、即、人法一箇の御本尊のことであると明かされているのです。すなわち、久遠元初自受用報身如来、末法御出現の御本仏日蓮大聖人、即、人法一箇の御本尊こそ、御出現せられた諸^{のうしやう}仏能生の根源であるのであります。

したがって、このことを当抄には「されば日蓮が胸の間は諸仏入定の処なり、舌の上は転法輪の所、喉は誕生の処、口中は正覚の砌なるべし」と、甚深の御指南をあそばされております。

そして最後に「かゝる不思議なる法華経の行者の住処なれば、いかでか靈山浄土に劣るべき。法妙なるが故に人貴し、人貴きが故に所^{ところ}尊しと申すは是なり」とありますが、「かゝる不思議なる法華経の行者」とあるのは、大聖人様は単なる法華経の行者ではなく、久遠元初の妙法を所持あそばすところの末法の御本仏であるからであります。すなわち、久遠元初自受用報身如来、末法の御本仏大聖人様のまします所は、靈山浄土に勝

るとも劣らぬ最勝の地であると仰せられているのであります。

「靈山浄土」というのは、釈尊が法華經を説かれた靈鷲山のことでありますが、転じて、仏の常寂光土を意味します。つまり、御本仏のまします所、すなわち常寂光土である故に、「法妙なるが故に人貴し、人貴きが故に所尊し」という『法華文句』の文を引かれて、このように仰せられているのであります。

大聖人様が一切衆生救済の末法の御本仏であるという所以は、今申し上げた、この御書をよくよく拝読すれば、お解りのことと思います。

少し時間が早いようなのですが、次の御書に入りますと長くなってしまうので、本日の講義はここまでといたします。

初めにも言いましたけれども、様々な世間の情勢を見ますと、やはり今こそ私達が、大聖人様の仏法をもって国を安んずるという『立正安国論』の原理に従い、行動を起こしていかなければならないのではないかと思います。

一方、創価学会は、あろうことか、今ではもう、全くでたらめな教義を主張しております。皆さん方は判っていると思うけれども、創価学会が宗門から離れていった時は、その差があまり判らなかつたかも知れません。ほんのわずかな差、ちょっとした行き違いぐらいにしか思っていなかつた方もいるかと思うのです。

でも、不思議なものです。やはり正しい道を歩んでいる我々と、邪義に^{おちい}陥っている創価学会の姿の違いは、初めは判らなくても、今となれば、はっきり判るでしょう。戒壇の大御本尊様への信仰を否定するようなことを平気で言う。あの人達の信心は、どこにあったのかと疑いたくなるほどです。

逆に言えば、以前、このお山に登山参詣して御戒壇様の功德をたくさん頂いた方々、今、あの方々は本当に、どのような気持ちであるかを考える時、私達はあの人達が正しい道に戻れるように折伏していかなければなりません。その人達の気持ちのなか、命のなかには、必ず求めるものがあるはずです。

あの方達だって、昔はこのお山に来て、功德をたくさん頂いて帰っていったのです。だから、御戒壇様にお目通りした喜びを知っているはずなのですよ。だから、そういう人達に、我々は正しく、大聖人様の仏法はこうあるべきだということを教えてあげる、そういう大きな役目があると、私は思います。

本日、来ていらっしゃるこのなかにも、やはり元は創価学会員で、創価学会をやめて日蓮正宗の正しい法華講の人となつた方もいると思います。また、皆さん方のお友達のなか、あるいは親戚・縁者のなかにも、いまだに学会に籍を置いて苦しんでいる方がいると思います。是非、そういった方々を救って行ってあげていただきたいと思います。

もちろん、創価学会ばかりではなくして、そのほかの邪義邪宗も破折しなければなりません。いつも言いますが、邪義は破折しなければ、絶対に滅びないのです。

今の日本の宗教界を見てごらんください。日蓮宗もそうでしょう。浄土宗もそうでしょう。わけの判らない宗派がごろごろと、たくさんあります。皆さんのなかには、彼らは謗法を犯して、悪いことをしているから、いずれ罰^{ばち}が当たって、自然にだめになっていくと思っている人がいるかも知れません。しかし、邪義は、破折しなければ滅びないのです。そこにむしろ、私達の折伏がどれほど大事なことを、一人ひとりが認識しなければならぬのです。

もちろん、彼らの隆盛というのは表向きだけでしょう。それだけのことだと思っても、現実にそういう姿があるのだから、私達がそれを破折して初めて、邪義は滅び去るのです。この原則を一人ひとりがしっかりと認識して、頑張っていたきたいと思えます。

特に、本日お集まりの皆さんは青年部の方々であります。やはり、青年部の方々が第一線に立って戦う、先陣に立つことは大事なんです。何事もそうです。歴史的な革命もみんな、そうでしょう。皆、青年達が活躍しています。

皆さん方が持っている若さという特権を活かして、これから邪義邪宗を徹底的に破折し、平成三十三年・法華講員八十万人体勢を必ず達成して、御本尊様の前で誇りを持って、みんなで「達成いたしました」と御報告申し上げたいと思えますので、どうぞ青年部の方々は、これから先も一生懸命、折伏に頑張っていたきたいと思えます。